

早生甘柿（伊豆）の安定生産に関する研究

第1報 着花特性と生理的落果の波相について

末次信行・高柳行雄

（佐賀県果樹試験場）

伊豆は連年極めて多数の着花をするが、生理的落果も著しくその生産は不安定である。そこで、筆者らは伊豆における着花特性と生理的落果の波相について、富有と比較しながら検討したのでその結果を報告する。

1. 材料および方法

1) 着花特性調査

(1) 供試樹 当場植栽の12~13年生伊豆, 富有各3樹, 各樹1主枝。

(2) 調査項目および方法 調査主枝より発生した全新梢を新梢長, 発生部位別に分け, 着花数および着葉数を調査した。新梢長区分は5cm未満, 5cm以上, 10cm以上, 20cm以上, 30cm以上の5区分に, 発生部位は結果母枝と結果母枝以外の骨格枝より直接発生したものとに区分した。調査期日は1977年5月23日および1978年5月26日である。

2) 生理的落果調査

(1) 供試樹 調査1に同じ。なお, 調査樹は1978年度の富有1樹を除き, いずれも授粉樹より15m以内に植栽されたものである。

(2) 調査項目および方法 調査主枝より発生した全着花枝より各品種100~120本を選び, 着花枝長別に分け, 開花から7月下旬まで5日毎に着花数を把握した。着花枝長別区分は調査1に準じた。なお, 供試樹は無摘花自然授粉とした。

2. 結果および考察

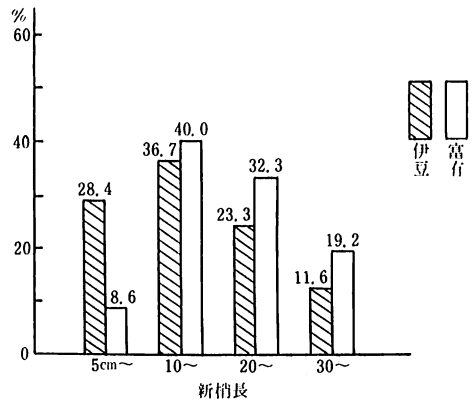
1) 着花特性調査

(1) 新梢長別の着花枝率をみると、伊豆は富有と比較

し、極めて高い着花枝率を示した。特に、10cm以上では全新梢に対して80%前後（77年度）および60~70%（78年度）に達した。結果母枝より発生した新梢では90%（77年度）ないし80%（78年度）にも達した。また、10cm未満の短い新梢においても伊豆は富有と比較し、極めて高い着花枝率を示した（第1表）。

(2) 従って、全着花枝に対する新梢長別の着花枝構成割合をみると、10cm未満の短い着花枝が富有では10%前後を占めるに過ぎないのに対し、伊豆では20~30%前後を占め、短い着花枝の負担割合が高いことが認められた（第1図）。

(3) 新梢長別の着花密度をみると、伊豆は富有と比較し、かなり高い着花密度を示した。特に、新梢10本あた



第1図 新梢長別着花枝構成（1977）

第1表 新梢長別着花枝率（'77~78）

年次	品 種 名	伊 豆								富 有									
		0 cm~		5 ~		10~		20~		30~		0 cm~		5 ~		10~		20~	
	新 梢 長	母枝	母枝以外	母枝	母枝以外	母枝	母枝以外	母枝	母枝以外	母枝	母枝以外	母枝	母枝以外	母枝	母枝以外	母枝	母枝以外	母枝	母枝以外
1977	新梢数(本)	—	—	72	16	81	18	55	8	27	4	—	—	109	30	195	41	124	29
	着花枝数(本)	—	—	61	0	75	2	50	0	25	0	—	—	27	0	125	0	101	0
	同上率(%)	—	—	84.7	0	92.6	11.1	90.9	0	92.6	0	—	—	24.8	0	64.1	0	81.5	0
	全体(%)	—	—	69.3	—	77.8	—	79.4	—	80.6	—	—	—	19.4	—	53.0	—	66.0	—
1978	新梢数(本)	135	53	100	26	143	33	42	9	27	10	84	49	164	33	224	31	78	27
	着花枝数(本)	16	0	59	1	109	1	35	1	24	0	1	0	16	0	76	0	38	1
	同上率(%)	12.0	0	59.0	3.9	76.2	3.0	83.3	11.1	88.0	0	1.2	0	9.8	0	33.9	0	48.7	3.7
	全体(%)	8.5	—	47.6	—	62.5	—	70.6	—	64.9	—	0.8	—	8.1	—	29.8	—	37.1	—

りの着花数でみると、2～4倍に達し、10cm未満の短い新梢においては4～9倍もの極めて高い着花密度を示した。

(4) 着花枝10本あたりの着花数および着花枝葉10枚あたりの着花数においても、伊豆は富有より高い着花密度を示した。

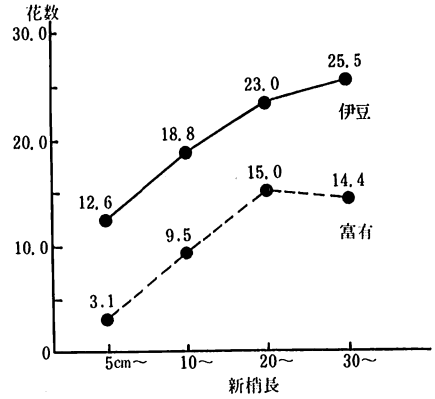
2) 生理的落果調査

(1) 生理的落果の波相をみると、伊豆では満開後2週間ないし20日目頃をピークにし、急激な落果が認められた。また、満開後1ヵ月目まではほとんどの生理的落果が終了するようである(第2表)。

(2) 富有では全体の生理的落果数も少なく、そのピークも伊豆より1週間前後は遅れるようである。なお、78年度の落果数が多いのは調査樹の内の1樹が授粉樹よりかなり離れていたためと思われる(第2表)。

(3) 着花枝長別の落果率をみると、一定の傾向は認められず、短い着花枝ほど落果率が高いといえないようである。これは、着花枝長が短いほど、着花枝10cmあた

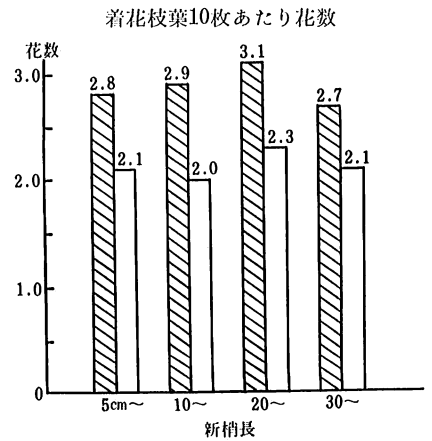
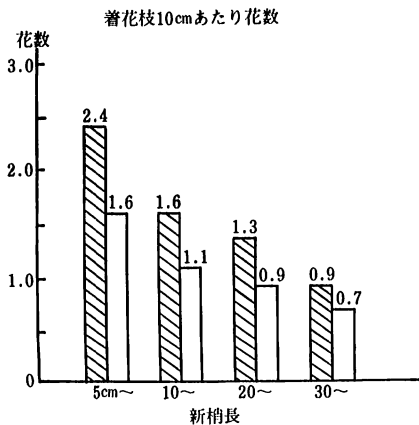
りの着花密度は高くなるにもかかわらず、着花枝葉10枚あたりの着花密度は変わらないためと推察された(第3図)。



第2図 新梢10本あたり花数 (1977)

第2表 生理的落果数の推移 ('77~78)

年次	品種名	供試着花数	5/20	/25	/30	6/5	/10	/15	/20	/25	/30	7/5	/10	/15	/20	/25	総落果数	同左率
1977	伊豆	289	0	2	31	129	32	23	5	8	4	5	2	2	2	1	246	85.1%
	富有	220	0	1	3	5	10	13	6	4	4	12	4	4	2	1	69	31.3
1978	伊豆	243	—	0	12	27	68	54	10	1	1	1	0	0	0	0	174	71.6
	富有	184	—	0	0	0	14	25	5	11	3	3	1	0	0	0	62	33.7



第3図 着花枝長別着花密度 (1977)